

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K04829

研究課題名(和文)"通い住民"の地域社会持続への寄与とその定量化

研究課題名(英文) contribution and quantification of the Commuting Residents role for rural sustainability

研究代表者

齋藤 雪彦 (Saito, Yukihiko)

千葉大学・大学院園芸学研究院・教授

研究者番号：80334481

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：1)東京から3時間圏の中山間地域に共通して、空き家となって10年以内が約4-6割程度、空き家所有者の月1回以上帰省が約3割、年1回以上帰省が約8割以上、農作業実施が約2割である。2)空き家所有者の社会的インパクトとして、下郷町では約1割弱(月1回以上帰省人口、耕作者、地域活動メンバー)から約2割弱(年1回以上帰省人口、主屋管理者、地域つきあいメンバー)、南牧では約1割強(月1回以上帰省人口、耕作者)から約3割(年1回以上帰省人口、主屋管理者)のインパクトが試算された。3)約6-7割の帰省者が、屋外レクリエーションなど個人で楽しむ活動を行い、約4割は何らかの楽しみを目的とする帰省と回答している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、転出者を一種の住民(通い住民)とみなして、地域社会の持続への寄与を定量的に明らかにしようとする試論である。フィールドを良く知る農村研究者にとっては、転出者が、地域の行事やつきあいに参加して、地域社会持続に寄与していることは、ある意味自明なことではある。しかし、このことは一般にはあまり知られておらず、また行政が転出者に着目することも希少であったために、人口減少の進む地域社会持続において有意な視点として提示し、現象の同定をすることで、転出者支援などの政策立案根拠とすることを目的とする。例えば能登半島地震の石川県復興プランにおいてもこうした転出者を含めた関係人口の役割が述べられている。

研究成果の概要(英文)：1) In the intermediate and mountainous areas where it takes 3 hours from Tokyo area, it is clarified that i) vacant houses within 10 years are about 40-60%, ii) vacant house owners who visit more than once a month are about 30%, iii) Vacant house owners who visit more than once a year are about more than 80%, iv) Vacant house owners who undergo farming are about 20%. 2) Social impacts are calculated that in Shimogo town, from less than 10% to less than 20% are vacant house owners among residents and vacant house owners(in Nanmoku village, from more than 10% to about 30%). 3) About 60-70% vacant house owners do outdoor recreation activities during homecoming, and about 40% vacant house owners answer that aims of home coming include having enjoyable time during the stays.

研究分野：農村計画

キーワード：通い住民 転出者 地域社会持続 空き家所有者 地域外家族 帰省者 集落 空間管理

1. 研究開始当初の背景

本研究は、転出者を一種の住民(通い住民)とみなして、地域社会の持続への寄与を定量的に明らかにしようとする試論である。フィールドを良く知る農村研究者にとっては、転出者が、地域の行事やつきあいに参加して、地域社会持続に寄与していることは、ある意味自明なことではある。しかし、このことは一般にはあまり知られておらず、また行政が転出者に着目することも希少であったために、人口減少の進む地域社会持続において有意な視点として提示し、現象の同定をすることで、転出者支援などの政策立案根拠としたい。

2. 研究の目的

研究の目的としては、転出者はどのくらいの頻度で地域と関わっているのか、その特徴からどのような層がどの程度存在するのか 帰省を楽しむ層が一定数いることを明らかにすることである。

3. 研究の方法

本章の調査対象地は、群馬県南牧村(地域外家族) 福島県下郷町(空き家所有者、地域外家族) 福島県会津坂下町(空き家所有者)であり、前科研の南牧村(空き家所有者) 神流町山間部(空き家所有者)のデータと適宜比較しながら考察を行う。

空き家所有者については、空き家等対策計画にかかる調査で特定された空き家所有者リストを用い、郵送アンケート調査を行った。地域外家族については、在住世帯に地域外家族の動向を聞くアンケート調査を実施、全戸配布(南牧村)もしくは自治体による郵送配布(会津坂下町)を行った。空き家所有者、地域外家族に関する調査、いずれも回収は返信用封筒による郵送とした。なお、以下では、調査ごとに、空き家所有者に関する調査であれば、自治体名(空き家) 地域外家族に関する調査であれば、自治体名(地域外)と表記した(例えば下郷(空き家) 下郷(地域外)等)。また調査時期が異なり、調査項目が揃っていないため、比較が部分的である分析もあることを付記したい。

群馬県西毛地域、福島県会津地域を選んだのは、おおむね東京から3時間圏内に到達可能な地域であり、中山間地域に属する他出住民の動向を見るためである。

山間地域である神流町、南牧村は急傾斜地が多く、山間集落では、接道が困難な家屋も見られ、下郷町は山間地域ではあるが、地形的には南牧村、神流町ほど急傾斜地は見られない。会津坂下町は中間地域であり、平場と山間部が混在する地域であると言える。神流町、南牧村、下郷町はおおむね、近隣地方都市に1時間以内に到達できるが、会津坂下町は30分程度で到達できる。

表1 調査地の概要

	下郷町	会津坂下	南牧	神流山間
調査年	2022	2022	2018	2019
高齢化率	45%	39%	65%	61%
世帯数	1996	5306	988	118
空き家数	501	470	496	130
空き家率	20%	8%?	33%	52%

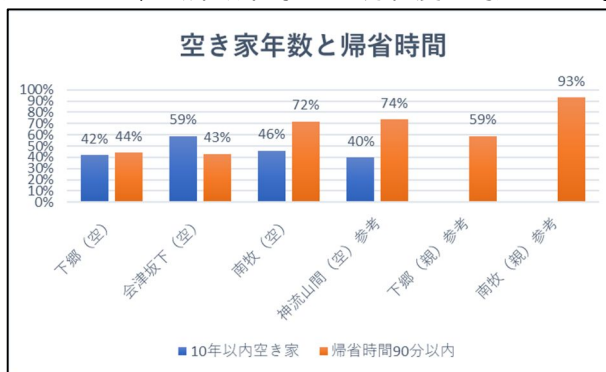


図1 空き家年数と帰省時間

4. 研究成果

(1) 年齢、空き家となった年数、帰省時間

空き家所有者の年齢を見ると、70歳以上が約3-5割、80歳以上が約1割前後であり(70歳以上、80歳以上それぞれ、下郷(空き家)51%、16%、会津坂下(空き家)40%、9%、神流山間(空き家)38%、11%、南牧(空き家)27%、10%)、地域外家族の年齢を見ると、65歳以上が約2-3割、75歳以上が約1割弱から2割弱である(65歳以上、75歳以上、それぞれ下郷(地域外)18%、4%、南牧(地域外)34%、17%)。空き家所有者の高齢化は総じて進行していると言えるが、住民の高齢化率が高い南牧では、空き家所有者の代替わりが進んでいるため、高齢化の程度は低い。地域外家族については、下郷の高齢化は、空き家所有者ほどではなく、逆に、南牧では空き家所有者に比べて進行している。これは、南牧では高齢化が早く進んだため、住民の高齢化に対応して、地域外家族の高齢化が進むが、代替わりにより空き家所有者は若年化したと推察される。

空き家所有者への調査で、空き家となった年数が10年以内の割合を見ると、下郷42%、会津坂下59%、南牧46%、神流(山間)40%となり、約4割から6割となり、そのうち5年以内の

割合を見ると下郷 20%、会津坂下 20%、南牧 25%、神流山間 20%と約 2 割から 2 割強となる（図 1）。近年、空き家の発生が継続的に起きていることが分かる。特に会津坂下では 20 年以上の空き家が 9% しかなく、空き家の増大は近年顕著である。

また空き家所有者、地域外家族の自家用車による帰省時間 90 分以内の割合を見ると、会津地域（下郷（空き家）44%、会津坂下（空き家）43%、下郷（地域外）59%）の方が、西毛地域（南牧（空き家）72%、神流山間（空き家）74%、南牧（地域外）93%）とその割合は低く、西毛地域の方が交通条件等より、他住民の近居が進んでいることがわかる（図 1）。同時に同一自治体で比較すると地域外家族（下郷（地域外）59%、南牧（地域外）93%）の方が、空き家所有者（下郷（空き家）44%、南牧（空き家）72%）よりその割合が高く、近居が進んでいることがわかる。これに対して 30 分以内を見ると、下郷（空き家）6%、南牧（空き家）7%、会津坂下（空き家）29%、神流山間（空き家）45%と、純粋に近隣都市との距離に左右され、90 分以内の傾向とは異なる。

地域外家族より空き家所有者の方が、転出した年代が早いと推定され、近年は近隣都市での雇用や交通条件の改善により近居が進んだと推定される。

（ 2 ） 帰省頻度

空き家所有者について、月 1 回以上の帰省は約 3 割前後（下郷（空き家）27%、会津坂下（空き家）34%、南牧（空き家）36%、神流山間（空き家）26%）、年 1 回以上の帰省は神流山間（空き家）の 7 割を除くと、約 8 割前後（下郷（空き家）86%、会津坂下（空き家）78%、南牧（空き家）84%、神流山間 70%）と地域差が比較的少ない（図 2）。これに比べると、地域外家族では、地域差が大きい（下郷（地域外家族）月 1 回以上 42%、年 1 回以上 84%、南牧（地域外家族）月 1 回以上 75%、年 1 回以上 99%）。地域外家族の帰省は、高齢親世代への生活支援の側面があり、特に月 1 回以上の高頻度の帰省では負担が大きいため、交通条件等による影響が大きいためであると推察される。

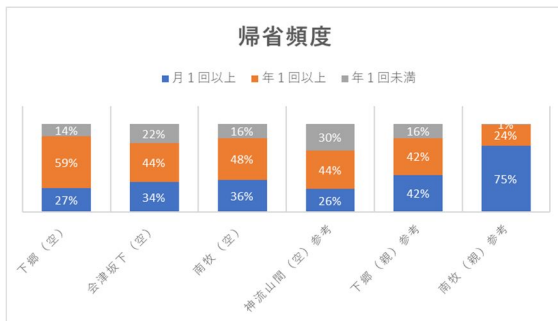


図 2 帰省頻度

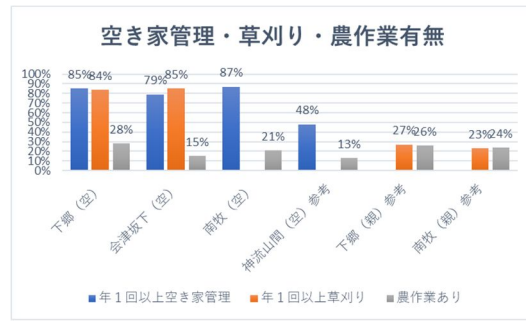


図 3 空き家管理・草刈り頻度と農作業有無

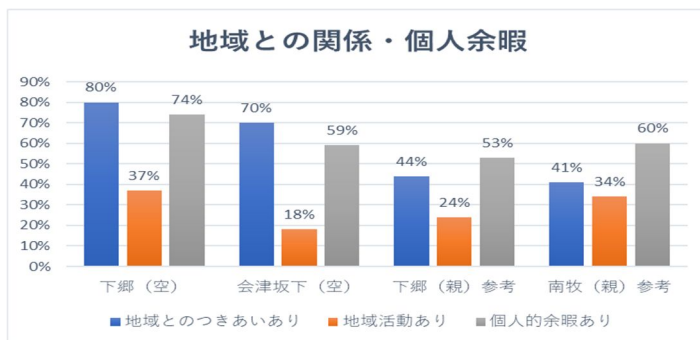


図 4 地域との関係および個人的余暇行動

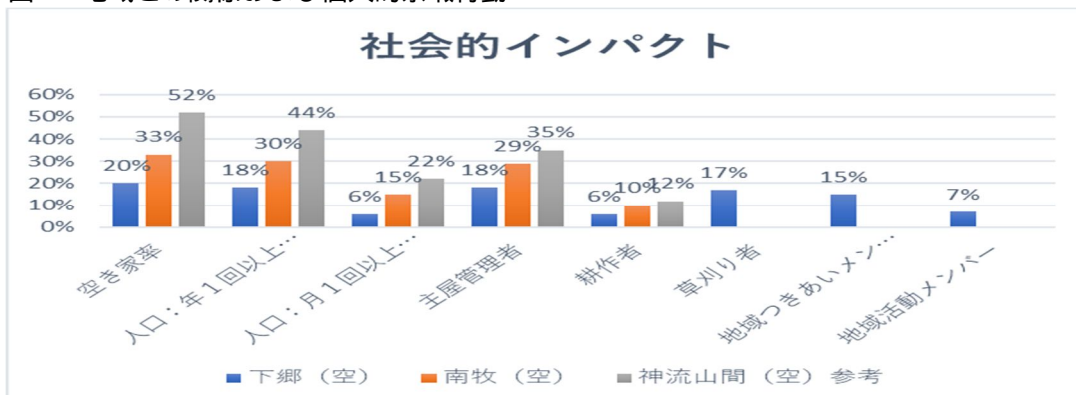


図 5 社会的インパクト

(3) 空間管理

年1回以上の空き家管理する者の割合、年1回以上草刈りをする者の割合(また月1回以上空き家管理する者の割合、年1回以上草刈りをする者の割合)は、神流山間(空き家)を除くと、おおむね帰省頻度と似た傾向を示す(下郷(空き家):帰省頻度86%、空き家管理85%、草刈り84%、会津坂下(空き家):帰省頻度78%、空き家管理79%、草刈り85%、南牧(空き家):帰省頻度84%、空き家管理87%、神流山間部は、急傾斜で道路に接道しない空き家も多く、帰省はするが空き家管理を放棄している者が多いと推定される)(図3)。

空間管理が帰省頻度を上回るのは、一部、地域住民へ空間管理を委託する者がいるためである。個別の調査ごとの分析によれば(データ省略)おおむね帰省のたびに空き家の扉・窓を開けて換気することは一般的だが、草刈りは季節を選んで実施している世帯も多いことがわかる。

地域外家族で年1回以上の草刈りをする者の割合は、親の作業を補完する位置づけであるため、年1回以上の草刈り実施者は3割弱である(下郷(地域外)27%、南牧(地域外)23%)。

農作業を実施する者の割合を見ると、空き家所有者、地域外家族に共通して、約2割前後であり、地域差も少ないことがわかる。

(4) 地域との関係

まず、空き家所有者の一般的な地域との関わりとして、墓参り、挨拶回り、葬儀への出席を見る。下郷ではおおむね9割弱が地域との関わりを持つが(墓参り86%、挨拶回り89%、葬儀88%)、会津坂下では墓参りは9割弱であるが、挨拶回り8割弱、葬儀6割と低い。会津坂下では個人的行動である墓参り以外の地域社会との関わりを持つ者が下郷に比べて少ないことがわかる。

空き家所有者で地域とのつきあいがある者の割合は約7-8割であり(下郷(空き家)80%、会津坂下(空き家)70%)、地域活動へ参加する者の割合は、約2-4割(下郷(空き家)37%、会津坂下(空き家)17%)であった(図4)。屋外で個人的余暇を過ごす者の割合も約6-7割(下郷(空き家)74%、会津坂下(空き家)59%)であった。下郷(空き家)に比べて、会津坂下(空き家)の方が10-20ポイント程度低くなっており、会津坂下の方がやや都市的な地域であり、地縁を維持する意欲(社会的要素)、地域の自然を楽しむ余暇を過ごしたい意欲(環境的要素)が低いことが推察された。

地域外家族で地域とのつきあいがある者の割合は約4割強(下郷(地域外)44%、南牧(地域外)41%)であり、地域活動へ参加する者の割合は約3割前後(下郷(地域外)24%、南牧(地域外)34%)、屋外で個人的余暇を過ごす者の割合も約6割弱(下郷(地域外)53%、南牧(地域外)60%)であった。地域外活動への参加では南牧(地域外)の方が10ポイント多いものの、山間部にあることが共通する下郷と南牧の地域差は少ないことがわかる。地域とのつきあい、地域活動参加について、同一自治体(下郷)でみると、空き家所有者と地域外家族では、後者は親世帯の補完的位置づけのため、約20-30ポイント程度その割合が低いことがわかる。

空き家所有者に対して、帰省の目的を聞いたところ、下郷、会津坂下では、墓参り、財産管理、次いで、つきあいと答える者が多いことは共通するが、財産管理が楽しみで、つきあいが楽しみで、ゆっくり過ごす・余暇を楽しむといった帰省に何らかの楽しみを見出す割合は会津坂下は下郷の約半数程度であり(財産管理楽しみ:下郷(空き家)17%、会津坂下(空き家)3%、つきあいが楽しみ:下郷(空き家)15%、会津坂下(空き家)8%、ゆっくり・余暇を楽しむ下郷(空き家)23%、会津坂下(空き家)13%)、上記の、会津坂下の「地縁を維持する意欲、地域の自然を楽しむ余暇を過ごしたい意欲が低い」傾向で説明が可能である。

さらに、個人的つきあい、地域活動、屋外で楽しむ活動の関係を見る(下郷町(空き家)、会津坂下町(空き家))。すると、3種の活動を行う層が下郷で多く(下郷37%、会津坂下19%)、3種とも行わない層が会津坂下で多い(下郷8%、会津坂下23%)が、個人的つきあいもしくは屋外で楽しむ活動を行う層が、地域活動は行わない層の割合はあまり変わらない(下郷55%、会津坂下58%)。両自治体に共通するのは、「個人的つきあいもしくは屋外で楽しむ活動を行わないが、地域活動を行う層」は見られないということである。つまり、「屋外で楽しむ活動」もしくは「個人的つきあい」が、地域と何らかの関わりを持つ段階とすると、「地域活動」への参加は、さらに関わりを深度化させた段階にあると推察できる。

そこで地域活動への参加を除外して、個人的つきあいと屋外で楽しむ活動の実施状況を見る。2種の活動を共に行う層が下郷の方が多く(下郷62%、会津坂下43%)が、2種の活動とも行わない層が会津坂下に多いこと(下郷8%、会津坂下24%)が確認されるが、基本的には会津坂下における屋外で楽しむ活動を行う層が少ない傾向による影響が大きい。

(5) 空き家所有者の社会的インパクトの試算

年1回以上帰省する空き家所有者を住民と想定してその人口からのインパクトを試算する(つまり、年1回以上帰省する空き家所有者/(年1回以上帰省する空き家所有者+住民)として計算する。以下同様である。)と、下郷18%、南牧30%、神流山間44%であり、空き家率から数ポイント下がった数字となる(空き家率:下郷20%、南牧33%、神流52%)。月1回以上帰省する空き家所有者の人口インパクトは、下郷6%、南牧18%、神流山間22%と、年1回以上帰省する空き家所有者からおおむね10-20ポイント程度減少する。主屋を管理する空き家所有者を住民と想定すると、同様に、下郷18%、南牧29%、神流山間35%であり、空き家管理の割合が

少ない神流山間を除けば、概ね空き家率から数ポイント減じた数字となる。耕作する空き家所有者を住民と想定すると、下郷 6%、南牧 10%、神流山間 12%と空き家率の 1/3 程度となる（図 5）

（ 6 ） 結論

地域との関わり

空き家所有者は地域外家族より活動頻度が一般的に高く、空き家所有者では、多い順で言うと、個人的つきあい、屋外レクリエーション、地域活動への参加であったが、地域外家族では、屋外レクリエーション、個人的つきあい、地域活動への参加であった。

共通する傾向

地域差が少なく、東京から 3 時間圏の中山間地域に共通する傾向が同定できた。例えば空き家となった年数が約 4-6 割程度であり、近年の空き家化の進行が確認されたこと、空き家所有者では月 1 回以上帰省が約 3 割、年 1 回以上帰省が約 8 割以上、農作業実施が約 2 割などは共通する傾向として指摘できる。また空き家所有者の地域との関係では、地域とのつきあいが約 7-8 割、地域活動参加が約 2-4 割、個人的余暇活動実施が約 6-7 割とやや幅があった。地域外家族の地域との関係では、地域とのつきあいが約 4 割強、地域活動参加が約 3 割、個人的余暇が約 6 割弱と、空き家所有者ほどの地域差は見られなかった。

地域差がある傾向

会津坂下は、対象自治体の中ではやや都市的性格を持ち、「地縁を維持する意欲、地域の自然を楽しむ余暇を過ごしたい意欲が低い」ことがわかる。また高齢化率が日本一でもある南牧村は、高齢化、空き家化の進展が早かったが、地域外家族の年齢は代替わりのために若年化しているが、空き家所有者は高齢化が進んでいること、地域外家族の近居が進んでいることが分かる。さらに、概して、西毛地域の方が会津地域より、近居が進んでいることがわかる。

通い住民の社会的インパクト

空き家所有者の社会的インパクトを試算したところ、空き家率が 20% の下郷町では約 1 割弱（月 1 回以上帰省人口、耕作者、地域活動メンバー）から約 2 割弱（年 1 回以上帰省人口、主屋管理者、地域つきあいメンバー）のインパクトがあり、空き家率 33% の南牧では約 1 割強（月 1 回以上帰省人口、耕作者）から約 3 割（年 1 回以上帰省人口、主屋管理者）のインパクトが試算された。

仮に月 1 回以上帰省する者を通い住民と見なすと、在住世帯と合わせて分母と見なすと、通い住民は全体の約 3 分の一を占める。地域でのつきあいに参加する者を通い住民と見なすとやはり通い住民は全体の 1/3 程度を占め、地域活動参加を通い住民と見なしても 1/4 程度を占めることがわかる。もちろん地域に居住していないので在住者に比べて活動に限界はあるが、地域が高齢化する中では、無視できない数字であると言える。

帰省時の余暇活動

多くの帰省者が、屋外レクリエーションなど個人で楽しむ活動を行っている。また空き家所有者の約 4 割は何らかの楽しみ（財産管理、つきあい、趣味やゆっくりすること）を目的とする帰省と回答している。帰省者のレクリエーションや個人的楽しみを尊重することが提言できる。つまり彼らの地域社会への参加だけではない「財産管理を含めた個人的事情、家族的行動」も広い意味での地域社会維持に貢献していると考えるのである（地域社会へ部分的に関わる者を部分的だと揶揄するのではなく、部分的にも関わってくると評価する視点と言っても良い）。

また、個人的余暇を過ごす約 6-7 割であり、帰省を個人的余暇の機会ととらえる層が多いことが分かる。地域活動に参加することはあるものの、主に個人・世帯で時間を過ごす彼らに対して、むやみに社会活動参加を求めるのではなく、個人的行動を尊重、サポートする支援の在り方もあるのではないだろうか。

今後の動向について

南牧村は高齢化率日本一であり、高齢化の先行事例として扱われることも多い。こうした視点でみると、近居が進み、空き家所有者の代替わりが進むこと、地域外家族の高頻度の帰省が確認され、他自治体に比べると持続可能性が高い状況であることが確認できる。一方、交通条件・地形条件に恵まれた都市的要素も見られる会津坂下がもっとも、地域との関係性が弱く、個人的余暇を過ごす層も少なく、先行きが懸念される。したがって、現時点では、平場に近く、空き家化がそれほど進行していない地域の方に対して、急峻な山間部で空き家化の先行地域の方が、地域社会の紐帯が残り、自然豊かな余暇を楽しめる環境を有するという点で、他住民の地域への関与が持続すると推察できる。また別の言い方をすれば、地域の居住持続性の厳しい地域の方が、その環境に一定程度適応して、他住民の関与により持続性を高めていると仮說的に言うことができる。いわゆる「農村のしぶとさ」の一つの現れであるとも解釈できる。

また最後に能登半島地震の復興に関連して、改めて、転出子（地域外家族）の存在が注目されている。つまり金沢・富山など都市に居住しつつ、実家のある能登での復興活動に携わる層である。石川県の復興プランにはこうした関係人口の巻き込みについても触れられているが、地区の意志決定等の自治的活動にオンラインや週末帰省を利用して関わってもらえる体制づくりを外部専門家の立場から提案・実践していきたいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 南宏、齋藤雪彦	4. 巻 18
2. 論文標題 山間地域における空き家所有世帯の帰省行動と地域社会への関与に関する研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本建築学会住宅系研究報告会論文集	6. 最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤雪彦	4. 巻 農村計画
2. 論文標題 「通い住民」の地域社会持続への寄与に関する研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 75-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 南宏、齋藤雪彦	4. 巻 18
2. 論文標題 山間地域における空き家所有世帯の帰省行動と地域社会への関与に関する研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本建築学会住宅系研究報告会論文集	6. 最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤雪彦	4. 巻 農村計画
2. 論文標題 「通い住民」の地域社会持続への寄与に関する研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 2023年度日本建築学会学術講演梗概集・農村計画	6. 最初と最後の頁 75-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤雪彦、野田満	4. 巻 農村計画部門
2. 論文標題 関係人口の果たす役割と地域の継承に関する考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2022年度日本建築学会大会研究協議会農村計画部門資料	6. 最初と最後の頁 28-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤雪彦	4. 巻 2021
2. 論文標題 三陸沿岸地域における被災者の生活再建 大船渡市H地区を事例として-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 2021年度日本建築学会大会農村計画部門研究協議会資料「東日本大震災の復興から見える一次産業の持続モデル」	6. 最初と最後の頁 39-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤雪彦 野田満	4. 巻 2021
2. 論文標題 移住・定住における個人志向とコミュニティ志向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 2021年度日本建築学会大会農村計画部門研究懇談会資料「コロナ禍の農山漁村地域」	6. 最初と最後の頁 23-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野田満 齋藤雪彦	4. 巻 2021
2. 論文標題 関係人口の再考に関する試論その2	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 2021年度日本建築学会大会農村計画部門研究懇談会資料「コロナ禍の農山漁村地域」	6. 最初と最後の頁 43-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yukihoko SAITO, Yumeng CHENG	4. 巻 2020
2. 論文標題 Homecoming Behaviors of Vacant House Owner and Their Relationship with Rural Society in Mountainous Areas: A Case Study of Nanmoku Village in Gunma Prefecture	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 journal of environmental information science	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yukihoko SAITO, Yumeng CHENG	4. 巻 15
2. 論文標題 Vacant House Management and Homecoming Behavior of Owners in Mountainous Areas - A Case Study in Kanna Town, Gunma Prefecture -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会住宅系研究報告会論文集	6. 最初と最後の頁 111-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 志村大成、齋藤雪彦
2. 発表標題 新規就農者の移住環境に関する研究
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 齋藤雪彦
2. 発表標題 群馬県西毛地域における「通い住民」の帰省行動とソーシャルインパクト、
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 齋藤 雪彦	4. 発行年 2022年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 176
3. 書名 むらづくり入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	野田 満 (noda mitsuru) (70793909)	東京都立大学・都市環境科学研究科・助教 (22604)	
研究 分担者	椎野 亜紀夫 (shiino akio) (00364240)	札幌市立大学・デザイン学部・教授 (20105)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------